

世界最高水準の照明灯が照らす 作品が持つ、本来の色を知る

見る対象が同じだからといって、見える「色」が常に同じとは限らない。
屋内外などの環境、照明灯の種類によって、色の見え方はまったく異なってくる。
繊細な色彩が重要視される芸術の現場において、太陽光下での忠実な色を再現する
人工太陽照明灯「SOLAX (ソーラックス)」が可能にすることを取材した。



上野の森美術館(東京)で5月に開催された、
「女子美術大学付属高等学校・中学校 創立
100周年記念 描く100年 創る100年[未来
へつなぐ展]」に展示された作品を人工太陽照
明灯[SOLAX]が照らす
撮影協力=遠山香苗



● LED照明

● SOLAX

照明灯によって、色彩の見え方は異なる

写真は、同じ作品の部分をLED照明(左図)と「SOLAX」(右図)で照らし比較したもの。美術館や部屋でよく使用されているLED照明も、比較すると、太陽光より黄色く見えていることがわかる

屋外から屋内へと移動した際に、紙や絵の色が違って見えた、という経験はないだろうか。その原因のひとつに考えられるのは、太陽光から照明灯へと光源が変わった、ということだ。美術館などで使われる照明は、主に白熱球や蛍光灯、LEDなど様々だが、

何が光源かによって、色彩の見え方はどれも微妙に異なってくる。私たちの知る名画の色は、照明灯による影響を受けて認識されている可能性が大いにあるのだ。「SOLAX」は、太陽光の専門メーカー、セリックが独自に開発した人工太陽照明灯だ。最大の特長は、

太陽光の下で見ると同じ色彩を、室内で再現できること。ここで指す「太陽光」とは、晴天時の正午前後2時間の間に地表に達する太陽光のことで、色彩評価において正確な色とされている。SOLAXは、この「太陽光」を再現する光源として世界最高水準を実現している。1987年の発売以来、自動車塗装や色校正の現場、太陽光の効果が必要な医学研究やバイオ産業など、幅広い分野で活躍。そして近年、美術館や博物館での採用が期待されている。

セリック代表取締役社長の佐藤郁夫は、「美術館などでは、カタログを制作する機会も多いですね。その現場で、基準に沿った色彩の見え方で作品を撮影するのは、とても大事なことです。今後は、記録・保存という分野にもアピールしていきたい」と話す。また、修復の現場でも普及の期待は高まる。2005年、絵画修復家の吉村絵美留が岡本太郎《明日の神

話》(1969)の修復をした際に、SOLAXを採用。のちに吉村は、「作品の色を正確につかむには、なくてはならない機材だった」と語っている。ほかの照明がもつ光のちらつきがないため、長時間の作業をしている際に、目の負担が小さいのも、魅力のひとつ。色彩の緻密さが求められる研究や開発の現場で、採用されているSOLAX。美術業界にも貢献できる場が広がっていることが、今回の取材で明らかになった。今後のさらなる浸透が、期待される。

information

人工太陽照明灯「SOLAX(ソーラックス)」

太陽光と同じ光を照射する、世界初の照明灯。美術館や作品の修復現場、印刷の色校正など、多岐にわたる場所で使用されている。7月22日~24日に東京ビッグサイトで開催される「第1回文化財保存・復元技術展」に、修復に必要な機材として出品される。

問合せ▶セリック

📍 東京都中央区入船3-1-2-505

☎ 03-3555-2261 🌐 www.serico.co.jp